

探求・川にちなんだ万葉集の歌

第88回

万葉の川心

元横浜市立子安小学校 教諭 澤井園子

上野国の相聞往来の歌

(巻第十四 三四一四番歌)

伊香保ろの 八尺の堰塞に 立つ虹の
頭ろまでも さ寝をさ寝て

人に会えない時代がくるとは思わなかった。人は元来、人の間で生きるものだが、こんなにもその距離について考えたことはない。その昔憧れたテレビ電話を、半世紀の時を過ぎ、ある日突然自分が日常で使うことになろうとは。それでも、やはり、実際に会いたい。万葉集を読むと、今会えない分、古の歌人の想いがしみる。川を守る巨大な堰から空に立つ虹のように、頭わらなくてもいいから横にいたい共寝をしたいという、まっすぐな想いが伝わってくる。子どもの頃、七色に美しく輝く「にじ」の漢字に、なぜ「虫」が入っているのか不思議に思ったことがある。調べると、「にじ」の語源は不明だが、「蛇」と結びついているようだ。小さな虫ではなく「は虫類」の方だったのだ。虹は「のじ」や「ぬじ」とも言う。平安時代の漢和辞書『和名類聚抄』には、「虹」「蜺」と三種の「にじ」があり、雌雄の区別がされた記述がある。天気占いや凶事の前兆の例もあり、和漢ともに反橋にたとえられていた。また、虹が現れることを「立つ」と表し、虹が立ったところには市が立つという言い伝えも広く行われていたという。「中世以降も蛇が息を吹いたものが虹になるという考えが広く見られた」とする辞書もある。川にかかる虹は、さながら川で水を飲む大蛇の姿なのだろうか。時代ごとの辞書で辿ると、さまざまな発見

があり、いつもわくわくする。万葉集には、虹の歌はこの一首のようで、各辞書によくこの歌が掲載されている。「伊香保山の大きな堰塞に立つ虹のように、人目につくまで共寝を続けたなら。」写真の碑は、群馬県渋川市伊香保町水沢にある水澤観世音の敷地内にある。その裏側には、説明書きの碑もあり、「橋本直香らの考証によればこの地に近い船尾滝より流下する滝沢川にもうけた往古の堰堤である」と記されている。

保育園で働くようになり、子どもたちからいつも元気をもらっている。もうすぐ小学生になるその子は、給食を前に、「ぼくたちの未来は、どんなふうになるんだろう。本当に楽しみだね。」と輝く瞳で友達に語っていた。そういえば、大人になって心配事ばかりを見つめていたような気がする。次から次にやって来る大変なことをしのぐのが精一杯だった。雨の後には虹が立つ。もう一度、夢を見よう。そして、この子のわくわく感が現実となるよう、今、大人の自分がすべきことをしておかなくては、とも思うのだ。



群馬県渋川市伊香保町水沢にある水澤観世音の敷地にて